

お化けとまちがえた話

小川未明

青空文庫

ある田舎に、二郎という子供がありました。よく隣の家へ遊びにゆきました。

その家には、二郎といっしょになって、遊ぶような子供はなかつたけれど、女房は、二郎をかわいがってくれました。

「おばさん、あの赤いかきの葉をとっておくれよ。」と、二郎は、裏にあつたかきの葉をさしていると、女房は、仕事をしながら、

「いま、これが終えたら、取つてあげますよ。」
と答えて、仕事がすむと、さおを持ってきて、二郎のほしいというかきの葉を取つてくれたこともあります。

「お婆さん、つるを折おつておくれよ。」と、二郎じろうは頼たのむと、女によう房ぼうは、

「はい、はい、いまこれがすむと折おつてあげますから待まつておいでなさいね。」といいました。

二郎じろうは、女によう房ぼうの仕しごと事ごとをしていゝそばで、おとなしく遊あそんでいました。そして、おりおり、その方ほうを見みては、

「お婆さん、まだかい。」と、催さい促そくをしたのであります。

女によう房ぼうの家うちは、貧ますしかったのであります。主人しゆじんは、行ぎよう商しょうをして、

晚ばん方がた、暗くらくならなければ帰かえつてこなかつたのでし

た。せがれは、旅たびへ奉ほう公こうにやられて、女によう房ぼうは、主人しゆじんの留る守すも家うちでいろいな仕しごと事ごとをしたり、手て内ない職しよくに封ふう筒とうを貼はつたり

していたのでした。

「おまえは、よくお隣へゆくが、おかみさんの仕事の邪魔をしてはいけないよ。」と、おばあさんは、二郎にいい聞かせたのです。しかし、二郎は、隣へ遊びにゆきました。ゆけば、人のよい女房は、

「二郎ちゃん、遊びにきたのかね。」と行って、心持ちよく迎えてくれました。そして、二郎が遊びに飽きて帰ろうとすると、「転ばんように、お帰り。また、遊びにきなさいね。」と、いつてくれたのであります。

秋も老けて、末になると、いつしかかきの木は坊主になつてしまつて、寒い木枯らしが、昼も夜も吹きさらしました。そして、

日は短くなつて、昼になつたかと思つたと、じきに晩となり暗くなつたのでした。

からすが、悲しそうに鳴いて、村の中はさびしげに見え、とうとう雪の降る冬になつてしまいました。

雪が降つて、地の上に積もると、二郎は、外へ出て遊ぶことができないから、いままでよりも、もつとたびたび、隣の家へ遊びにゆくようになりました。

女房は、明るい、障子窓の下へ、箱を置いて、それを台にして、上で封筒を貼っていました。日が当たると、屋根の雪が解けて、ポトリポトリと音をたて、障子に黒い影をうつして落ちるのでした。二郎は、げたについた雪を、入り口の柱でたた

いて、落としてから、

「おばさん……。」「と行って、入ってきました。

二郎のおばあさんは、あまり、たびたび二郎が、隣へ行って邪魔をするので、

「二郎や、いくら、お隣のおかみさんは、いい人でも、そう毎日いっては、しまいにきてくれるなどいうから、あまりゆくのではない。」「といたしました。

「おばあさん、おかみさんは、いやな顔なんかしないよ。」と、二郎は答えました。

「それは、いけば、いやな顔なんかしないけれど、心の内では、毎日、仕事の邪魔をしてうるさい子だと思っていなさるだろう

……。」と、おばあさんはいいました。

ちようど、その明くる日のことです。二郎は静かに足音のしないように、隣となりうちの家の入り口ぐちからはいつてゆきました。

「おかみさんは、どんな顔かおをしているだろう？」と、二郎は、思おもつたからです。

二郎は、玄関げんかんの障子しょうじの穴あなから、おかみさんの仕事しごとをしている方ほうをながめました。そして、びっくりしました。それは、いつものやさしい女にようぼう房ぼうでなく、怖おそろしい、三みつ目めの化ばけものが、箱はこの前まえにすわって仕事しごとをしていたからです。

二郎は、家うちへ走り帰かえってこたつの中なかへもぐり込んで、小ちいさくなつていました。

「二郎や、どうかしたか？ おかみさんにしかられでもしたのだらう……。」「と、おばあさんは、笑いながらいわれました。

二郎は、不思議なことがあるものだと思つた。

「おばあさん、隣のおかみさんは、三つ目のお化けにばけていたよ。」「といいました。

「おまえは、なにをいう？」と、おばあさんは、やはりこたつに当たりながら、笑つていわれました。

「おばあさん、うそでない、ほんとうだから。」「と、二郎は、こういいながら、なおも怖ろしがつてふとんを頭からかぶつていました。

「おまえが見たのなら、お化けかもしれない。」「

「そんなら、隣のおかみさんは、お化け？」

「なんともいえない。」と、おばあさんは、笑いました。

「どうして、隣のおかみさんは、お化けなの？」と、二郎はおばあさんに、しつこくたずねました。

「おまえが見たというからさ。あまりたびたびゆくと、お化けに食べられるから、もうゆかないほうがいい。」と、おばあさんはいわれました。

二郎は、翌日から、隣へ遊びにいかなくなりました。そして、家にばかりいて、おばあさんを相手にいろいろなことをねだったり、わがままをいいました。おばあさんは、困って、

「二郎や、すこし、お隣へでもいって遊んでこい。このごろは、

ちつとも隣となりへいかないのう。」といわれました。

おばあさんがいけといわれても、二郎じろうは、どうしてもゆくき気になりませんでした。そして、いつか三つ目みつめの化けばものが、箱はこの前まえにすわって仕事しごとをしていたことを思い出だすと、ぞつと身みの毛けがよだったのです。

いままで、毎まい日にちのように、二郎じろうが遊あそびにきたのに急きゆうにこなくなつたので、隣となりの女によう房ぼうはどうしたのだらうと思おもいました。それで、ある日ひ、二郎じろうの家うちへきたときに、おばあさんにそのことをたずねました。おばあさんは、いつか、二郎じろうが、いったとき、おかみさんでなく、三つ目みつめの化けばものが、仕事しごとをしていたといつて、それから、いかないうです、と答こたえたのです。

すると、隣となりのおかみさんは、声こえをたてて笑いわらました。

「町まちへいったとき、二郎じろうちゃんに上げあようと思おもつて買かつてきた面めんを、もう遊あそびにきなさるころだと思おもつてかぶしごとつて仕事しごとをしていたのを、二郎じろうちゃんが見みて、びびつくりななささつたのですよ。」と、おかみさんはいいました。

この話はなしで、みんなが大おお笑わらいはりました。やがて、春はるになりなりました。子供こどもは外そとへ出でて遊あそぶようになり、二郎じろうは、その年としから学がっこ校こうへゆゆくことになりました。そして、ししぜん、隣となりの家うちへもいままでのように、たびたびゆゆかなくななつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

※表題は底本では、「お化《ば》けとまちがえた話《はなし》」
となっております。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

お化けとまちがえた話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>